

## 秋月韋軒の遺文について

中西 達治

一 秋月悌次郎の名は胤永、字は子錫、韋軒はその号である。彼は文政七年（一八二四）生まれ、会津藩士丸山四郎右衛門胤道（家禄百五十石）の二男で秋月氏を継いだ。十歳の時、藩校日新館に入り、秀才のほまれ高く、十九歳のとき江戸に出て松平謹次郎（慎齋）に師事した。二十三歳、幕府の昌平坂学問所に入り、書生寮の副舎長を経て嘉永六年、三十歳にして舎長となる。安政三年（一八五六）三十三歳の時、舎長を辞し退塾、越後を経て帰郷した。その後、安政四年から六年にかけて、医師を華岡青洲に学んでいる。安政六年、藩の許可を受けて、上方、西国、九州を巡歴、二年にわたる見聞を『觀光集』『列藩名君賢臣事実』として藩に提出した。万延元年（一八六〇）の桜田門外の変に絡んだ幕府と水戸藩の軋轢の調停役として、会津藩主松平容保は秋月と外島義直を起用、平穩にことを納めることができた。文久二年（一八六二）、京都守護職となった藩主容保に従って入京し、公用方として諸藩との交渉にあたり、また公武間の融和のため尽力した。この頃、薩摩藩士の高崎左太郎（正風）と親交を結ぶ。中でも有名なものは、会津連合を成し遂げた文久三年八月十八日の政変（禁門の変）である。高崎と組んで尊王攘夷派の公家と長州を天皇から遠ざけたこの政変は、七卿都落ちと呼ばれるが、長州の憤激をかい、後の会津戦争における長州藩士の強硬姿勢と無謀な殺戮の遠因をなすこととなった。

元治元年四十一歳の時、家老横山主税の病死にあい、秋月は帰郷、翌慶応元年、左遷されて斜里の代官となった。慶応二年一月、薩摩が会津から離れて長州と結び事態は急変、彼は同年十二月、急遽京都に呼び戻されることとなった。慶応四年正月六日、幕府軍が鳥羽伏見の戦いに敗れると、徳川慶喜は大坂城を脱出、松平容保、松平定敬ら側近のみを引き連れて軍艦開陽によって江戸に帰った。その後いわゆる「会津嘆願書」を作成したが、長州藩士の妨害で成功しなかった。戊辰の役には軍事奉行添役として越後方面に出陣し、降伏に先だって藩主の命により米沢藩に使いをした。開城の際は調印のための使者をつとめ、役後、戦争責任者として終身禁固の刑を受け、手代木勝任と共に美濃高須藩に預けられた。明治五年特赦となり、太政官に出仕したが、のちに大学予備門、第一高等中学校などの教職につき、明治二十八年、熊本の五高を最後に退職した。明治三十三年一月五日東京に没す、七十七歳。五高時代に同僚であったラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、悌次郎を「神のような人」と呼んでいる。著書に、大正二年七月、岡山県において出版された『韋軒遺稿』がある。この遺稿集は、没後遺族によって編纂刊行されたものである。

この経歴でわかるとおり、彼は数奇な生涯をおくったが、その折々感懐を叙した詩文を残した。本稿では、特に会津戦争の当事者として責任を問われ、美濃高須藩に終身禁固の刑を受けていた期間の動静に

注目して、同地に残された資料を紹介しておく。

二

会津戊辰戦争を指揮した当時の藩主松平容保は、美濃高須藩主十代松平義建の第七子であり、会津松平家に養子に入った。その関係もあり、二人は配流先の高須において、主君に忠誠を尽くしたとして高く評価され、厚遇されていた。同じ頃残された会津藩士達が、青森斗南への移住など辛酸を舐め尽くしたのに対して、暖衣飽食とまでは行かぬまでも、かなりゆったりとした生活をしてきた。この間のいきさつは、高須から会津の一族に当てた韋軒の何通かの手紙に詳しい。今、秋月一江氏の『視点を交えた 面白い会津の歴史』に収載されている韋軒の書簡により、その間の事情を探ってみることにする。これは、明治元年江戸に下獄した後、小倉藩御預けとなった後、改めて明治二年夏、高須藩御預けとなって江戸から高須に護送された韋軒が、その年の暮れに郷里の母宛に送った手紙の一部である。

七月五日 高須へ着、飲食万端誠に御丁寧、毎日御菓子、御酒被<sub>レ</sub>下、風呂も日々相立、即日若年役の人見舞として参り、追付善孝院様より(これは大殿様の御産母に御座候)御使にて茶道具と茶並につば入の御菓子御贈被<sub>レ</sub>下誠に御懇ろの御口上に御座候。又範次郎様より御使にて御慰勞被<sub>レ</sub>下、結構の御菓子沢山拜領被<sub>レ</sub>御付、又宮崎と申(これは桑名様御産母に御座候)奥女中酒肴杯被<sub>レ</sub>贈、総て御厚情の事共誠に難<sub>レ</sub>有仕合に御座候。就て私共居所は御国元相応士中屋敷に御座候。座敷両者へ、兩人被<sub>レ</sub>差置、六畳に八畳の間南北と分れ、南の庭にはみかん、橙の類六七本種立、北の庭には菊を移し種え、今は菊の花盛、みかんの色付最中にて、扱々見事なる事に御座候。菊柑等何れも藩中の人進物、又

は在の物杯聞及みかんなど進物に呉、御筆を頂戴仕度杯申様なる事に御座候外、畑類は野菜作り置候事に御座候。南の部屋に私、北の部屋に手代木殿被<sub>レ</sub>居候事也。附添への人は玄閑足軽壱人夫婦者二人、これは飲食衣服、給仕買物等致し、外に御中間と唱へ候もの日々三人にて交代、小使水汲畑作等致し、又御賄頭様のものその下役様の者日々見廻り、大約用事を承り候。時には若年寄荒川官三(この人はこの藩の人物に御座候)、又公用人達夜分時々参り呉れ御酒給へる事にて、藩中へ追々知り人も出来、酒肴茸杯方々より被<sub>レ</sub>贈、詩歌の贈答杯致し面白き事に御座候。昨年暮、揚屋に居候事思ひ見れば、おそろしき鬼の側を去りてやさしき母の手につく様なる心地に御座候。範次郎様、善孝院様より度々御肴等被<sub>レ</sub>下難<sub>レ</sub>有事に御座候。方々御家中を始め町在まで義士達の忠臣だの感心だのとて詩を作り呉れの、書を認めてくれのと打続被<sub>レ</sub>頼、不孝の浦島次郎ひよつとは忠臣孝子かと思ひ候程の事、実はおかしくもあり笑止敷も在り、昨年暮の難渋が今日の楽と相成候 (明治二年十二月二日 母宛、高須よりの第一信)

文中、善孝院とあるのが、「これは大殿様の御産母に御座候」とあることで分かるとおり、容保の生母であり、範次郎とあるのは、義建の第十一子、十三代高須藩主だった松平義勇で、容保の弟に当たる。また、「宮崎と申奥女中」は、「桑名様御産母」とあるように、容保に同行して会津若松の籠城にも参加した桑名藩主松平定敬の生母である。定敬も義建第八子で、桑名松平家に養子に出ていた。この頃はそれぞれ江戸の藩邸で生活していた藩主たちがいっせいに江戸退去をして国元に帰ってきており、こうした出会いとなったものであろう。身の回りを世話する中間が付き、士分の屋敷をあてがわれ、後にはそれぞれ一戸建てに移っている。茶菓、酒肴、折々の果物などを届けられて、

何不自由ない生活をしていることが窺われる。母を心配させないようにとという配慮もあるとは思われるが、事実こうした生活をしていたものであろう。詩歌の贈答、あるいは藩士や在方からの作詩、染筆の依頼などが多かったとあることは、『韋軒遺稿』や、現在高須に残されている遺墨からもよく分かる。

三

現在、海津市歴史民俗資料館には、手代木勝任の短冊三点と絵色紙二点、秋月韋軒の短冊一点、掛け軸二点の他、美濃上有知の人村瀬雪峽描くところの養老の滝図に秋月、手代木が雪峽とともに賛を施した掛け軸一点が収蔵されている。(別に、高須幽囚中に国元から呼び寄せた養子胤浩の「発彦根赴高須途中宿関ヶ原所得」という後書きのある七言絶句の軸一点がある。)ここで、韋軒の詩文についてみておくことにする。

一 録旧作

決死両回猶未死

決死両回、猶未だ死せず、

何凶杯酒与君同

何ぞ凶らん、杯酒を君と同じうせんとは。

将談京洛危難事

将に京洛危難のことを談せんとすれば、

一半恍然属夢中

一半恍然夢中に属す。

短冊に記された七言絶句である。旧作とあるが、『韋軒遺稿』中にこの詩はない。韋軒は何度も死地に赴いているが、ここに「両回」といっているのは、京都時代と会津若松落城の二件であろう。もっと細かくいえば、勤王の志士につけねらわれていた京都時代、特に禁門の変はその首謀者の一人であったし、会津落城の直前には城を脱して開城、降伏の使者を務めている。新撰組の関わる京都守護時代の会津藩の動きに密接に関わっていた韋軒にとっては、禁門の政変、鳥羽伏見

の戦など、時代の激動の中心にいたという思いが強かったはずである。戦後酒を酌み交わした相手は、誰なのか、その時行動を共にしていた同士か、あるいははかつて西国漫遊の途次萩において親しくなり会津攻防戦さいには敵将だった奥平謙輔あたりかも知れない。敵対していた人物ばかりとは限らないが、戦後の述懐として万感の想いをうたっているといえよう。

二 前面桜洲後面原

寒潮捲雪吐還吞

前面は桜洲、後面は原、寒潮雪を捲き、吐きまた吞む。

峰臨尖碧細如髮

峰は尖碧に臨み、細きこと髪のように、

山外佑稀見海門

山外の佑(右)、稀に開聞を見る。

「辱知 秋月胤永」と詩の下に署名し、「薩摩城下一覽録示」と題を示した後に、「長谷川志兄」という為書きがある。この長谷川氏が誰であるかは不明である。韋軒は、安政六年(一八五九)から翌年にかけて、藩の許しを得て中国、四国、九州地方を歴訪し、遙か薩摩まで足を伸ばした。この時の記録は『觀光集』として残されている。『韋軒遺稿』中にこの詩はないが、薩摩に関する詩二篇が収載されていて、この時の様子を知ることが出来る。一つは、かつて昌平坂学問所において机を並べていた重野安繹が、奄美大島に流されていることを偲んだ詩である。今一つは、「至薩洲」という七絶である。

觀光適及薩摩州

觀光してたまたま薩摩州に及ぶ。

已是蜻蜒洲尽頭

已に是蜻蜒洲尽頭。

絶海茫茫何所見

絶海茫茫として何の所を見ん。

大涛如屋自琉球

大涛屋の如く琉球自りす。

「蜻蜒洲」とは日本列島のこと。日本列島最南端で、琉球から押し寄せる大浪を見ているという壮大な光景をうたっている。これに対して、前掲の詩は、鹿兒島城下、桜島を前にし、薩摩平野を

後ろに冬の錦江湾を臨み見て、碎け散る波濤の遙か彼方に開闢岳を望見するとう、華麗な光景がうたわれており、併せ読むと、鹿児島城下にあった韋軒の詩情がよく理解できる。もちろん高須在任の長谷川某にとって、薩摩は未知の土地である。書を与えるさい韋軒は自分の観光先の見聞を話して聞かせたに違いない。

三 雖貧勿求無道之産雖窮勿詔

貧窮素非私唯不幸之所致也

悠々如龍猛々如犀

抱徳隱名潛身以齋待一陽來復之時

若不然時則了生來之境涯樂彼天命更無極

貧すと雖も無道之産を求むる勿れ。窮すと雖も詔ふ勿れ。

貧素と私に非ず。唯不幸之致す所也。

悠々たること龍の如く、猛々しきこと犀の如く、

徳を抱き名を隠し、身を潜め、以て一陽來復之時を齋き待つ。

若し然らざる時んば則ち、生來の境涯を了へ、彼の天命を樂

しむこと更に極り無し。

「録楠公之誼応」（楠公の誼に応ずるを録す）と題する述懐である。

たとえ現在不遇であったとしても、貧窮を恥じることなく、竜虎のご

とき勇猛心を内に秘めて時の至るを待ち、もしそれが叶わなかったと

きには、これも天命として我が生涯を悔いなく送るべきだという。

『太平記』にその活躍をうたわれている楠正成の義に殉じた行動を題

意にしたことで、自らの行動と境遇を振り返っていると見るべきであ

ろう。

四

養老の滝観瀑図は、中央に滝の絵を描き、画面右上にて手代木勝任

の和歌、左に韋軒の詩、右下に雪峽の詩がある。収めた箱には、「村瀨雪峽養老滝自画賛手代木勝任 一幅」という箱書きがあり、箱の中に、この軸の製作事情を記した紙片が二紙収められている。そのメモは、

明治四辛未年九月

養老滝自画賛 村瀨

雪峽筆

又讚元会津藩

手代木直衛勝任哥

同秋月悌次郎胤永

号ハ韋軒詩

明治四辛未年九月右三人共

藤七郎面会直二認メ

貫ひ真正筆無相違候也

と、

記

一 養老山滝自画賛

村瀨雪峽筆

右ハ藤七郎余に面会

認メ貫ひ来り且又

手代木秋月両大人とも

面会直二三人共二認メ

貫ひ来り無相違候也

明治四辛未年九月

貫雲雅

とほぼ同趣旨のことが記されている。これによるとこの絵の賛は、明治四年九月、藤七郎という人物が三人に直接面会して執筆してもらっ



たものであり、それを貫雲という人物が確認したという趣である。藤七郎、貫雲いずれも経歴などは分からない。この軸の成立について興味深い点は、幽閉中の二人が美濃在住の文人村瀬雪峽と交流することが出来たということ、さらに彼らが自由に養老の滝を見に出かけていることである。

伊藤信の『濃飛文教史』によれば、村瀬雪峽の名は礦、通称東作、字は君尊、雪峽はその号である。文政十年（一八二七）武儀郡上有知（尾張藩領）に生まれた。父は近世南画の大家秋水、頼山陽門下の村瀬藤城の甥にあたる。幼いときより学を好み伯父藤城および父秋水に就いて経史を受け、詩文を学ぶとともに画を父秋水に学んだ。その風韻は父に及ばないが、技巧は寧ろ父をしのぐものがあるといわれている。後江戸に出て、佐藤一斎の門に入り、さらに京師および浪華に赴いて後藤松陰、広瀬旭莊の教えを受けて郷里に帰り、伯父藤城を助けて門下生を教育した。嘉永五年（一八五二）、これまでの業績により、名字帯刀を許されている。この前年嘉永四年、父、伯父と共に京都に行き、梁川星巖をはじめ当時の名家と交流、頼三樹三郎などと交わって勤王に心を通じた。維新後は名古屋に住み、明治十二年（一八七九）八月五日、病没。享年五十三。明治四年頃にはすでに名古屋に出ていたものであろうか。こうした経歴の人物との交流があったことは、章軒がかつて昌平坂学問所において長らく学んでいたことが背景にあるうが、この頃の境遇から見て興味深いことと言わねばなるまい。それはともかく、賛の内容は次の通りである。

いその上ふかしみゆきもたき水の 老をやしなふ名になかれけり

勝任

至孝動天自古然

至孝天を動かすこと、古より然り。

多君賜類遂前縁  
又欣三伏炎、日  
已覺飛泉響耳辺  
辛未年章軒題

多君類を賜ひ、前縁を遂ぐ。  
又欣ぶ、三伏炎、日、  
已に覺ゆ、飛泉の耳の辺に響くを。

隨風白雨洒中天  
又是迅雷轟那辺  
怪底驪龍呼不答  
湿雲深処抱珠眠  
雪峽詩画

隨風白雨、中天に洒ぎ、  
又是迅雷、那辺に轟く。  
怪底の驪龍、呼べど答へず、  
湿雲深き処、珠を抱きて眠る。

手代木勝任の和歌は、養老という地名に即したほめ歌である。これに対して章軒の賛は、孝子の行いが天をも動かしたという養老の滝の故事を現実の自分の運命に重ね、今自分もここに志を同じうする人々とともにあるといい、滝の冷気を感じ取っている。また雪峽は滝の情景を描写し、滝壺に眠る黒龍に思いをはせる。三者三様の主題が興味深い。

## 五

これ以外に管見に入ったものとしては、故原田昭二氏宅の大軸がある。

乱極真人出

乱の極み真人出づ。

其捕聞俊傑

其れ俊傑と聞こゆるを捕らふに、

容雖如婦人

容は婦人の如しと雖も、

万略元超絶

万略もと超絶す。

与書豈有異

与書あに異あらんや。

墮履非尋常

激之使有忍

即是陶冶方

男子有所期

、在成志

功名付浮雲

韓彭擊瓶智

寸胸制楚又魏秦

報韓安對真臣隣

惜此擾亂回天手

不出六国合縱辰

張良作辛未之首夏錄示

原田雅契

墮履尋常に非ず。

激の使忍ぶことあり。

即ちこれ陶冶の方なり。

男子期する所有り。

期する所志を成すに有り。

功名浮雲に付す。

韓彭擊瓶の智、

寸胸楚又魏秦を制す。

韓に報ず、安んぞ真臣の隣に対へん。

惜しむらくはこの擾亂回天の手、

六国合縱の時に出来ることを。

張良。作、辛未の首夏錄示。

秋月胤永

「原田雅契」とあるのは、明治維新当時の原田家の当主原田種徳である。種徳は、通称鉄太郎、嘉永三年の生まれで、安政二年家督を継ぎ、明治二年に高須藩校日新堂の訓導となっている。明治四年<sup>注</sup>當時は少壯の学者、教育者として韋軒の経歴に注目していたものである。韋軒もこれに応えたいことが、この詩文の内容からうかがい知ることが出来る。太公望という語の元となった故事、漢楚軍談の英雄張良の経歴をふまえ、その事跡に現在の自分の亡国の臣としての境遇をなすらえた長詩は、一読作者の万感の思いを感じさせる。

今簡単な訳と語注を付した。

乱が極限に達すると真に頼りになる人物が現れる。

俊傑と噂のある人物を捕らえたところが、

容貌は婦人のようであるが、  
策略は元来人に超絶している。

黄石公から与えられた書物は何か特別な内容だったのでない。

黄石公が、わざと履物を落として拾わせたところに尋常でないものがある。

激しく使われることには忍ぶべき事がある。

これ即ち身を陶冶することである。

男子は心に期したところがある。

期する所というのは、志を達成することである。

功名は、浮雲に付けてやる。

韓信、彭越を項羽と戦わせて勝利した、瓶を撃つという知略、

小さな胸（のはかりごと）でよく強大な楚、あるいは魏、秦を制圧する。

亡国韓に報いるのに、何として、真の臣下の隣にこたえようか。

惜しいことはこの擾亂を制圧する方法が、

擾亂の初期、六国が連携して敵に当たるべきときに出てこなかったことである。

張良。作、明治四年（陰曆）四月錄示。

語註

▼容雖如婦人 史記留公（張良のこと）世家に、張良は、病弱で、容貌は婦人の如しとある。

▼与書豈有異：即是陶冶方 張良は、若いころ、一人の老人に

であった。その老人は、わざと履物を橋の下に落とし、張良に拾ってこいと命じた。怒りを抑えて拾ってくると今度は履かせろという。殴りかかろうとしたが気を取り直して履かせると、老人は、

五日後の朝来い、教えることがあるという。当日行ってみるとも  
う老人は来ていて、遅れるとは何事か、五日後に来いという。鶏  
鳴と同時に行くが、又老人が来ていて。更に五日後、今度は、真  
夜中から行って待っていると、老人が来て、よろしい、この書物  
を読めば、王者の師になれると云い、十三年後にお前が見ること  
になる黄色の石が自分だと云って去った。といい、一冊の書物を  
渡した。内容を見ると、太公望の兵法書であった。こうした記事  
をふまえている。

▼男子有所期 張良は、元韓の宰相の家柄で、姫姓。韓が秦に  
滅ぼされた後、始皇帝の暗殺に失敗し、追求を逃れるために張と  
改姓した。張良にとっては、韓の再興が最大の目的であり、漢の  
高祖に仕えたのも本来はその目的を達成するためであった。期す  
る所とはそのことを云う。ただし、結局漢の高祖をたすけて、そ  
の功績をうたわれたが、そうした世俗の功名には無頓着だったた  
め浮雲云々という言葉が出てくることになる。

▼韓彭擊瓶智 なかなか派兵に協力しなかった韓信と彭越（と  
もに漢初期の將軍。当時は二人とも王となっていた。）を上手く  
利用して項羽を垓下に追いつめ、甕を打って將兵に楚の歌を歌わ  
せた計略。

▼寸胸制楚又魏秦 漢の高祖の述懐に、策を帷帳の中にめぐら  
し、勝ちを千里の外に決することが出来たのは、張良の功績であ  
るとある。秦の打倒後、項羽その他との戦いに勝利し漢をたてた  
ことを云う。

▼報韓 旧主の韓を復興ようと努力したこと。

▼惜此擾乱回天手 不出六国合縱辰 戦国七雄といわれた諸国  
が、秦と対抗しようとして、合従の策を唱えたことがある。この  
時、張良の策がでていたら、という気持ち。「辰」は時。

六

長野県下伊那郡阿南町新野にある阿南町歴史民俗資料館には、一隻  
の貼り混ぜ屏風が収蔵されている。元同地の旧家一山家に所蔵され  
いたもので、一山家が現在資料館展示室となっている蔵を町に譲り渡  
したさい、合わせて譲られたものという。その貼り混ぜ屏風の中に、  
藤田東湖などと並んで秋月悌次郎、手代木勝任の遺墨があるので紹介  
しておきたい。

この屏風は、たまたま高須藩の所領支配の関係を調査するため同地  
を訪れた際、史料館内にあったものを発見したのだが、この地方の人  
達が、はるばる美濃高須との間を行き来していたこと、話題の人物の  
染筆にかかる色紙の類を珍重していたことが分かる。幕末から明治初  
期にかけて、高須藩領として支配関係があった高須と信州の新野とが、  
意外なところで結びついたのである。

手代木勝任は「田家の月」という題の和歌一首、秋月悌次郎は、韋  
軒と署名のある無題の七言絶句を記した三枚の色紙である。

手代木氏の和歌は、

田家の月

おのつからもるをは月にまかせてか まばらにみゆる小山田の庵

勝任

というもので、解釈の要もないであろう。

秋月氏の絶句は以下のようなものである。

一 京洛時合猷謀 京洛この時猷謀に合ひ、

謫居臥病北蝦洲 謫居して病に臥す、北蝦洲。

死埋枯骨還非惡 死して枯骨を埋む、還た惡むに非ず。

唐太以南皆帝州 唐太以南皆帝州。

韋軒陳人

この詩は、『韋軒遺稿』中に、「余以文久二年参京都守護政務。慶応元年移令于蝦夷舍利。病中所得。」という前書きを付して収められている。はじめにも記したように、韋軒は、京都において公用役を務めていたとき、庇護者の病死にあい職を解かれて蝦夷地に左遷されるという事件があった。これはその時の心情を叙したものである。最果ての地に骨を埋めることになっても、樺太以南は同じ日本の国内ではないかという悲壮な叙情が胸を打つ。

二 落木悲風暗月光 落木悲風、月光暗し。

中宵揮淚起彷徨 中宵、涙を振るい、起ちて彷徨す。

生為降虜豈堪過 生きて降虜となる、あに過ぐるに堪えん。

即是親朋戰死場 即ちこれ、親朋戰死の場なり。 韋軒

この詩は、『韋軒遺稿』中に、「十二月与佐川官兵衛海老名郡治井深茂右衛門等十一人同赴東京。小倉藩兵護送之。過白河所得。」という前書きのもと、「一去元期不復還。丈夫何事淚漣漣。老親臥病年将百。夢繞那須山外山。」とともに収められている。前書きによって知られるとおり、鶴ヶ城開城後主だった藩士たちの処分が決まり、小倉藩士に護送されて東京の獄に送られる途中、戊辰戦争の激戦地であった白河を通り過ぎたときの感慨であり、敗軍の将としての心情が読者の胸を打つ。

これらの旧作を、配流先で記しているところにも、平穏な日々にと現れてくる激情をかいま見ることが出来るのである。

三 閑溪深山生俊民 閑溪深山、俊民を生ず。

尤難忠孝出天真 尤も難し、忠孝の天真に出づること。  
藩侯新政恩波遠 藩侯の新政、恩波遠く、  
施及仁風頼此人 仁風を施及するに、此の人を頼まん。

韋軒

「藩侯」というのは、この地方を支配していた高須藩主のこと。「山峡の奥深く俊敏な人材が輩出する」と書き出されたこの詩は、僻地に新政の恩沢が波及することの遅いことを歎き、そこから来た、今自分の前にいる人物を頼りにしているという内容で、前二作と異なり、揮毫依頼者に即した作詩がなされているようで、こうした配慮からも韋軒がもてはやされた理由が分かってくる。

結語

以上、現在管見に入った韋軒の遺文を概観した。それぞれに執筆当時の境遇と作者の心情をよく知ることの出来る作品といえよう。先にも引用した、高須からの家族宛の書簡中には、かなり多くの作品を残している様子が分かる。まだまだ知られていない作品があると思われる。さらに調査を続けたい。

注1 手代木勝任の短冊の和歌は次の三作品である。

社頭月

いその上ふるのみ社世々を経てつきせむ物か秋夜の月

遠山霞

隅田河つつみのを草もえ初てかすみわたれるお筑波の山

関時雨

逢坂の関の杉むら時雨らんくるる日の岡山科の里 勝任

注2 秋月胤浩の関ヶ原の詩は次の通りである。

古戦場辺夕照斜



馬蹄明日是親家

無窮客恨今宵散

西北千峰帶晚霞

發彦根赴高須途中

宿関ヶ原所得

秋月胤浩

注<sup>3</sup> 原田種徳は、明治十年日新学校校長となり、明治四十四年まで教育に尽力した。大正十五年歿。